

「史蹟西澤曠野先生墓所碑」について

整理番号	題額	題額揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
与野〇六	史蹟西澤曠野先生墓所	渡邊金造	渡邊金造	渡邊金造

鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	一九三一・昭和一七	本町東	長伝寺	和文

一. はじめに

本石碑は、西澤曠野の墓所が史跡指定を受けたことを契機として、曠野を顕彰するため  
に作られた顕彰碑である。

○写真1 石碑正面



○写真2 「碑記」部分



## 二、翻刻並に訳注

### ■翻刻

(正面)

◎題額 (篆書体)

## 史蹟西澤曠野先生墓所

(背面)

◎碑記

西澤先生名ハ周字ハ子邦曠野又夢澤ト號ス幼名萬次家ヲ繼キテ義右衛門ト改メ晚年愚公ト稱ス武州與野ノ人寛保三年生ル少壯學ニ志シ江戸ニ出テ□細井平洲ニ從ヒ業成リ郷ニ還リ生業ノ旁ヲ徒ヲ延キテ教諭ス天性至孝親ニ事ヘ最モ謹ム父ノ死スルヤ三年ノ喪ニ服シ家ニ孝經堂ヲ作り父祖ノ靈牌ヲ奉安シ毎朝一族ヲ率キテ堂ニ入り孝經ヲ誦讀ス孝悌ノ風一郷ヲ化シ先生ヲ呼フニ與野聖人ヲ以テス高山正之曾テ其名ヲ慕ヒ來リ見テ舊識ノ如シ細井平洲老ヲ告クルヤ代ツテ先生ヲ尾藩ニ薦メムトス先生固辭シテ受ケス人皆其ノ高義ニ服ス文政四年九月二十五日病ミテ歿ス享年七十九友人久留米侯文學樺島石梁其ノ碑文ヲ撰ス與野町長井原義助君ハ義ヲ好ムノ士ナリ常ニ郷土ノ偉人ヲ顯彰シ以テ風教ノ振興ニ資ス今回先生ノ墓所史蹟ニ指定セラレタルヲ機トシ長傳寺住職大和田觀成師ト胥謀リ先生高德ノ一斑ヲ石ニ刻シ永ク後昆ニ傳ヘムトス予此ノ舉ヲ美トシ聊カ其ノ顛末ヲ識ス

昭和十七年龍集壬午十二月

陸軍中將正四位勲二等功五級渡邊金造撰并書

■訳注

◎題額

◎碑記

●本文 (いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した)

西澤先生、名ハ周、字ハ子邦、曠野、又夢澤ト號ス。幼名萬次。家ヲ繼キテ義右衛門ト改メ、晩年愚公ト稱ス。

武州與野ノ人。

寛保三年生ル。

少壯學ニ志シ、江戸ニ出テ、細井平洲ニ從ヒ、業成リ、郷ニ還リ、生業ノ旁ヲ、徒ヲ延<sup>ひ</sup>キテ教諭ス。

天性至孝、親ニ事ヘ、最モ謹ム。父ノ死スルヤ、三年ノ喪ニ服シ、家ニ孝經堂ヲ作り、父祖ノ靈牌ヲ奉安シ、毎朝一族ヲ率キテ堂ニ入り、孝經ヲ誦讀ス。孝悌ノ風、一郷ヲ化シ、先生ヲ呼フニ、與野聖人ヲ以テス。

高山正之、曾テ其名ヲ慕ヒ、來リ見テ、舊識ノ如シ。

細井平洲老ヲ告クルヤ、代ツテ先生ヲ尾藩ニ薦メムトス。先生固辭シテ受ケス。人皆其ノ

高義二服ス。

文政四年九月二十五日、病ミテ歿ス。享年七十九。

友人久留米侯文學樺島石梁、其ノ碑文ヲ撰ス。

與野町長井原義助君ハ、義ヲ好ムノ士ナリ。常ニ郷土ノ偉人ヲ顯彰シ、以テ風教ノ振興ニ資ス。今回先生ノ墓所史蹟ニ指定セラレタルヲ機トシ、長傳寺住職大和田觀成師トともに胥謀リ、先生高德ノ一斑ヲ石ニ刻シ、永ク後昆ニ傳ヘムトス。

予此ノ擧ヲ美トシ、聊カ其ノ顛末ヲ識ス。

昭和十七年龍集壬午十二月。

陸軍中將正四位勲二等功五級渡邊金造撰并書。

### ●人物

○西澤曠野翁 寛保三（一七四三）年から文政四（一八二二）年。諱は周、字は子邦、通称万次、西澤家当主としての通称儀右衛門。折衷学派の細井平洲に学んだが、郷里の与野に帰り、名主としての務めを果たす傍ら、地域の教育にも力を入れ、「孝経」の講読などを通して郷人を感化した。また天明の飢饉では資材をなげうって救済にあたるなど、地域振興にもつとめた。与野の俳人鈴木莊丹（一七三二〜一八一五）や久下戸村（現川越市）の儒者奥貫友山（一七〇八〜一七八七）などとも交遊があつた。芳野金陵に「西澤愚公傳」がある（「金陵遺稿」所収）。

○細井平洲 享保十三（一七二八）年から享和元（一八〇一）年。本姓は紀氏。号は平洲または如来山人、諱は徳民、通称は甚三郎。字は世馨。尾張国知多郡平島村（現愛知県東海市）出身。朱子学等一派の教えにこだわらず、様々な学派学説の長所を取るといふ、いわゆる「折衷学」の立場であつた。米沢藩や尾張藩に招かれて侍講や藩校の学長を務めたりした。米沢藩の上杉鷹山からの信任を受け、米沢市の松岬神社に、上杉鷹山と共に祀られている。

○高山正之 高山彦九郎。延享四（一七四七）から寛政五（一七九三）年。江戸時代後期の思想家。林子平、蒲生君平とともに「寛政の三奇人」と称された。諱が正之、字は仲繩、号は金山・赤城山人など。彦九郎は別名。上野国新田郡細谷村の郷士の出身。のちに江戸へ出て細井平洲の門下に入る。日本国中を旅して、様々な人と交遊し、詳しい旅日記を残している。寛政五年に久留米に入り、自刃した。

○樺島石梁 宝暦四（一七五四）年から文政十（一八二八）年。石梁は号で、通称は勇七、諱は公礼、字は世儀。久留米藩出身で、天明六（一七八六）年、細井平洲の門に入る。以後平洲の私塾「嚶鳴館」で学び、塾長にまでなった。久留米藩に戻ると、藩政の刷新につとめるほか、久留米藩藩校明善堂の設立にあたり、その校長となった。墓所は久留米市寺町の真教寺にある。

○井原義助 明治十二（一八七九）年から昭和二十八（一九五三）年。与野町の戸長を務める父井原嶽之助の長男。井原家の先祖は、岩槻城主太田家配下の在地武士といわれ、江戸時代には名主・問屋場年寄をつとめる名家であつた。義助は浦和中学校（現浦和高校）を卒業、家業の地主を継いだ。その後与野駅開設運動などに携わり、大正三（一九一四）年に与野町長に就任。その後さらに三回、都合十九年にわたって与野町長をつとめた。

○渡邊金造 明治七（一八七四）年から昭和四十（一九六五）年。群馬県前橋市生まれ。明治三十（一八九七）年に陸軍士官学校を、同三十九（一九〇六）年に陸軍大学校をそれ

ぞれ卒業。近衛師団参謀・台湾軍参謀長などを歴任し、昭和二（一九二七）年に陸軍中將に進級、下関要塞司令官に補任せられる。同三（一九二八）年に予備役編入となる。昭和初期に谷田村（今のさいたま市浦和区前地）に居を構え、刀水と号して、趣味として史伝研究にふけるようになる。特に埼玉県関係の国学・漢学者、僧侶などの史料を蒐集し、「埼玉史談」等の地方史研究雑誌に、県内のさまざまな人物の研究論文を発表している。昭和期の、きつての埼玉県地方史研究者といえるだろう。その成果は日本書誌学大系の『渡辺刀水集』（五巻）で見ることができる。彼が蒐集した近世近代の人物の書簡等の史料は、東京都立図書館特別文庫室所蔵の「渡辺刀水旧蔵諸家書簡文庫」として、八千五百点がまとめられている。

### ●注

○寛保三年 西暦一七四三年。

○与野聖人 刀水は、この碑文では当時の人々が曠野を「与野聖人」と呼んだ、と書くが、彼の論文「西澤曠野と其子孫」においては、「我が西澤曠野先生は、細井平洲の研究者高瀬次郎氏が与野聖人と呼んで居ります」と言い、その呼称が近代になってのものだとしている。実際のところ、江戸時代や明治期に、曠野を与野聖人と呼んだ形跡はみられない（「与野人物誌」。芳野金陵「西澤愚公傳」（金陵遺稿）巻六）では「江戸城之西七里、與野里有君子、曰愚公」とある。

○高山正之曾テ其名ヲ慕ヒ 高山彦九郎が与野に西澤曠野を訪ねた話は、墓碑等にはみえず、芳野金陵「西澤愚公傳」に見える。

○細井平洲老ヲ告クルヤ 細井平洲が尾張藩の藩校校長として西澤曠野を推薦した話は、墓碑等の曠野関連資料や細井平洲関連資料には見えず、芳野金陵「西澤愚公傳」に見える。

○尾藩 尾張徳川藩。

○文政四年 西暦一八二一年。

○文學 学のある儒生。

○風教 徳によって教え導く。

○後昆 子孫、後世。

○龍集 歳次。龍集壬午は、壬午の歳の意。

### ●口語訳

西澤先生、名は周、字は子邦。曠野、また夢澤と号した。幼名は万次。家督を継いで、家長の名である義右衛門と改めた。晩年は愚公と自称した。

武蔵の国の与野の人である。

寛保三（一七四三）年の生まれ。

少壮のころより学に志し、江戸に出て、細井平洲の門に入った。学業が成ると、郷里の与野に戻り、家業のかたわら、弟子を招いて学問を講じた。

天性、とても孝行であり、親にお仕えすること、最も謹厳であった。父親が亡くなると、（当時としては破格の）三年の喪に服した。家に孝経堂という施設を作り、父祖の位牌を奉安し、毎朝一族を率いて堂に入り、孝経を誦読した。親への孝と兄や年長者への悌の徳の風気が、その郷里を教化し、人びとは先生を「与野聖人」と呼んだ。

高山彦九郎も、曠野の名声を慕い、与野にやって来て、まるで旧知の間柄のように親し

く交わったのである。

細井平洲が年老いたとして、尾張藩の藩校校長から身を引こうとしたとき、曠野先生をその替わりに推薦しようとした。しかし、先生は固辞して受けなかった。人びとは、先生の崇高で正義に適っている行いに敬服した。

文政四年九月二十五日、病みて没した。享年七十九歳であった。

友人の久留米藩の文學樺島石梁が墓碑銘を撰述した。

与野町長の井原義助君は、正義・道義を好む人物である。常に郷土の偉人を顕彰し、それによって、風俗教育の振興を図ろうとしている。このたび、曠野先生の墓所が史蹟に指定されたことを契機として、長伝寺の住職である大和田観成師とともに謀り、先生の高德の一斑を石に刻み、長く後輩たちに伝えようと考えた。

私のこの企てを素晴らしいものだと思感したので、その顛末をここに記すのである。

昭和十七年壬午の歳十二月。

陸軍中將正四位勲二等功五級渡邊金造が文章を撰述し、また書した。

### 三．資料

(一)「新編武蔵風土記稿」(文化三十(一八三〇)年)卷一五五 足立郡之二十一

#### ● 與野領

◎ 與野町・寺院

○ 長傳寺

「淨土宗、江戸増上寺末、貞樹山觀智院と號す、古は御朱印地なりしが、後故ありて収公せられしと云、開山は普光觀智國師なれど、それより以前草創ありし古刹を中興せしなるべしと云、本尊は彌陀の立像長三尺許、作は定朝とも或は運慶とも云、内佛の本尊は三尊の彌陀長一尺三寸許、惠心の作なり、又愛染の像あり、長五寸許、運慶の作なり、佛前に葵御紋を彫たる木地の香爐一箇あり、公より御寄附のものなりと云ふ」

(二)「武蔵国郡村誌」(明治十五(一八八二)年) 卷之十

◎ 與野町・仏寺

○ 長伝寺

「縦四十八間横四十六間面積六百二十四坪町の北端にあり淨土宗東京芝増上寺の末派たり(以下「風土記稿」)」

### 四．主な参考資料

#### ① 翻刻

・『与野市史 近代史料編』(一九八三)

#### ② 論文など

- ・ 芳野金陵「西澤愚公傳」(金陵遺稿) 卷六、芳野世経編、一八八八)。
- ・ 渡邊刀水「西澤曠野と其子孫」『埼玉史談』(四ノ五、一九三三)、『渡辺刀水集』四(青裳堂書店、一九八九)所収。
- ・ 『与野人物誌』(与野市教育委員会生涯学習課編、一九九八)。

#### ③ 関連碑文

- ・「西澤曠野の墓碑」(「与野〇四」)
- ・「西澤曠野夫人の墓碑」(「与野〇五」)
- ・「西澤蘭陵の墓碑」(「与野〇六」)

## 五・史蹟指定と碑文内容

渡辺刀水は、碑文で「西澤曠野の墓が「史蹟指定」された」というが、確認できなかった。少なくとも「官報」に掲載される「国の史蹟」指定ではない。埼玉県の指定についても、確認できず、どのレベルでの「史蹟指定」なのか、不明である。

国の史蹟指定で言えば、大正八(一九一九)年に「史蹟名勝天然記念物法」が制定され、国の史蹟指定制度が始まる。これを受けて、各道府県は、史蹟等の候補地の選定を行うが、埼玉県でも、同十(一九二一)年に史蹟名勝天然記念物調査会を作り、調査保存に着手する。そして同十二(一九二三)年に、史蹟候補地の調査結果の第一報である「自治資料埼玉縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第一輯」(埼玉県)が刊行され、「古墳墓の部」に「西澤曠野の墓」があがっている。そして昭和八(一九三三)には、浦和鳳翔閣などが明治天皇聖蹟として史蹟指定されているが、曠野の墓はこの段階では選に漏れている。

なお「報告書」は墓石の現況について「裏面には碑文を刻すれども、現今磨滅して殆ど之を讀下する能わず」という(注)。

本碑文の内容は、曠野を礼賛するものとなっている。その点は他の頌徳碑と変わらないが、曠野の墓碑などの当時の一次資料からすると、称賛が過度に過ぎる点が見られる。

「注・与野聖人」の項でも述べたが、渡辺は、その著「西澤曠野と其子孫」では、曠野を「与野聖人」と呼んだのは、昭和の高瀬代次郎だというが、本碑文では「先生ヲ呼フニ、與野聖人ヲ以テス」と、曠野の生前から「与野聖人」の呼称があったかのような書き方をしている。さらに高名な「高山彦九郎」が、「曾テ其名ヲ慕ヒ、來リ見テ、舊識ノ如シ」と、曠野の名声を慕って与野を訪れ旧知の間柄のような交わりをしたというが、そのことを伝える資料は、芳野金陵の「西澤愚公傳」以外にはない。また、細井平洲が尾張藩における自分の後釜として曠野を推薦したが、曠野が辞退したと言う話も、芳野金陵の伝記以外には見えない。

これらを考えると、本碑文は、墓碑銘などの比較的確実性の高い資料よりも、いささか確実さに乏しい資料も使っている、芳野金陵の「西澤愚公傳」に大きく依拠し、曠野を過剰に褒め称え「与野聖人」に祭り上げようとしているのではないか、と推測される。比較的慎重な論を目指していた「西澤曠野と其子孫」においても、渡辺は、近江聖人中江藤樹、但馬聖人池田草庵とならば、曠野も与野聖人と称するにふさわしく、「贈位」すなわち叙勲の対象となるよう働きかけようと呼びかけている。

頌徳碑というものは、その人の顕彰を目的とするもので、称賛の度合いが高くなりがちであるが、本碑文はとりわけその傾向が強い。それは、石碑の建立を進めたのが、当時与野町の名士で町長であった井原義助であったことも関わりがあるだろう。本碑文でも述べているが、井原は与野町の偉人を顕彰し、与野町の名を高めることを目指していた。昭和八年に、浦和の鳳翔閣が史蹟指定を受けて浦和の名を高めた。いわばそれに対抗して、与野の名を高めるものとして、曠野の墓の史蹟指定と、曠野を過度に顕彰する指定記念石碑の建立があったのであろう。

(注) 現在碑文は、ある程度磨滅しているが判読可能である。指定へ向けて調査が行われた大正期の段階では磨滅しており、その後彫りなおしたとは考えにくく、当時もほぼ現状と同じだったので無いか。つまりこの調査報告はかなり杜撰だったのでないか。本文でも触れた浦和鳳翔閣についても、「埼玉縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第二輯」で紹介しているが、そこに掲載されている鳳翔閣関連の碑文「行在所記念之碑」は誤字がかなり見受けられる。正確さよりも、いかに価値があるかを強調するもので、倉卒に作られた感がある。曠野の墓碑についても、きちんと読まなかったのだろう。

以上

二〇二四年三月 薄井俊二訳す